
D E A T H N O T E ~parallel world~

闇狼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

DEATH NOTE ~parallel world~

【Zコード】

Z9406C

【作者名】

闇狼

【あらすじ】

新世界の神“キラ”と世界一の名探偵“L”的対決に興味を示す女性がいた。その名は、“S”。神VS探偵VS殺し屋の三つ巴の対決 果たして、どんな結末が待っているのか

おもてなし（前書き）

これはただの血口満足小説です！
読まれるかどうかは任意でお願いします。

時は現代。

“キラ”の支配に全世界が怯えている現代。

最近現れた“キラ”は世界中の犯罪者を次々と裁き、世界を恐怖に陥れた。

その大胆不敵な裁きに政府や警察は手を出せなかつた。

しかし、“L”と呼ばれる世界一の探偵が立ち上がり、キラ vs Lの壮絶な戦いが始まつた。

そんな中、また別に立ち上がる一人の女性がいた。

その女性の名は

“
S
”

「」は東京都内にあるマンションの最上階の一室だ。
最上階なだけに半端なく広く、内装も豪華だ。窓からは朝方なのか、
朝日がうつすら見えている。

そんな中、一人の女性がリビングルームの机のノートパソコンに向かっていた。

その女性は日本人特有の、いや、日本人以上に美しい漆黒の滑らかな髪に濡れた黒い瞳、小ぶりの鼻に真っ赤な唇。まさに大和撫子といつてもいいほどの美しい女性だった。

カタカタカタ…

その女性はカタカタとキーボードを打ちながらコーヒーを口に運んだ。

その時、メールの着信を知らせる音がノートパソコンからした。

女性はキーボードを打つ手を止め、マウスを握ってメールを開いた。

Dear・シェリー

任務だ。

相手は高橋此守。

一週間以内に始末しろ。

From : MDS

女性はそのメールを見て溜息をついた。

「また殺しか……」

どうやら女性の元に来たメールは殺しの依頼らしい。
と、このことはこの女性は殺し屋なのだろうか。しかし、メールが
命令口調なことから彼女には主というものがいるらしい。
組織的な殺し屋集団のようなものだろうか。

女性はコーヒーカップを持って立ち上がり、台所へ向かつてそれを
流しに置くとそのまま寝室へ向かつた。

「はあ……MDSの奴らも無理な注文するわね……次から次へと……」

おそらく彼女はついわざと帰ってきたばかりなのだろう。
……殺しの仕事から。

女性はベッドに倒れこむとそのまま眠りについた。

真つ暗な、闇

いいよ、どうだらう

闇　闇　闇

闇

闇闇闇闇闇

光がない

光なんて見えない

光なんて

女性は重い瞼を開けた。

「…頭痛い」

女性は頭を押さえながらズボンに入ったままになつてた携帯を取り出した。

携帯は午後8時を示していた。 そういえば部屋が真っ暗だ。 よほど疲れていたのだろう。 12時間以上眠つていたのだ。

女性は溜息をつくとふらふらとリビングに向かい、電気を付けてソファーに深く腰掛けた。

ソファーの上に放られていたリモコンを手に取り、適当にボタンを

押した。

するとトレーディングコースキャスターの男性が現れた。

『では、次のコースです。本日の午後4時頃、東南アジアで根を張っていたMDSという犯罪組織が壊滅しました。』

女性はその言葉を聞いて顔を強張らせた。

MDSといえば彼女のメールの中にあった言葉だ。やはり彼女の属している組織なのだろう。それが壊滅したということなのだろうか。

『MDSのボスである中国人の王金魁を含む主要メンバー数名が心臓麻痺により死亡したとECPOは述べています。心臓麻痺という死因からこれは“キラ”による裁きだと思われます。』

女性は目を見開いた。

王…確かにMDSのボスの名前だわ。

どうやら、本当に壊滅したみたいね…

…と、こつこつとは仕事はナシ、かしらね。

女性は考えるよつに口に手をやつた。

「…面白こじやない。……キラ、か。」

女性はペロッと唇を一舐めするとニヤリと笑った。
それは、背筋が凍るほど笑みだった。

「キラ……ふふ、面白くなつやつ。」

女性は立ち上がり、シャワーを浴びるべく浴室へ向かった。

「キラは最近現れた大量殺人鬼であり 世界中の警察、そして 世界一の探偵“L”が立ち上がった…」

女性はノートパソコンのキラに関するホームページに田を通していった。

「L…キラ…」

女性は何かを考えているように口に手をやつた。そして、ふつと笑つた。

「面白いじゃない。」

女性は怪しげな笑みを浮かべて目の前のパソコンに見入った。

「キラ、L…なら、私は“S”と名乗りましょうか…」

女性はさう言つてキラに關する掲示板に打ち込んだ。

n a m e・名無じさん

私の名前は“S”。
キラに賛同する人間であり、反対する人間でもある。
また、Lに賛同する人間であり、反対する人間でもある。

そして、キラと「の敵でもある。

私はS。

女性 これからはSと呼ぶべきか は、不敵に微笑んでその書き込みを眺めた。

「やキラのような天才ならばこの書き込みにはすぐに気がつくでしょうね…

Sはパソコンをシャットダウンした。

そしてコーヒーを淹れ、ソファーアに腰を落ち着かせた。

キラや…会ってみたいわね。

一人の対決、この目で見てみたいわ。退屈しのぎにはなるでしょうし……それに、私を縛っていた組織も壊滅したからやる」ともなくなった……

一人に会うには……

……

Sは「コーヒーを一口飲んだ。

「に接觸した方がいいわね。

Sは真剣な顔つきに変わり、思案に暮れ始めた。

「……世界一の探偵であり、全世界の警察を動かせる
こんなのからじやあ接触できないわね……
……確かににはワタリという有能な助手がいたわね
ワタリ……

Sは「一ヒーを持ったまま立ち上がり、再びノートパソコンを開いてインターネットを起動した。

ワタリ：「同様、ファイルはない…

が、しという世界一の天才を支えられるほどの人間は少ないはず。
しは探偵。探偵という仕事は様々な情報が必要になる。その様々な
情報を一遍に集めるには：

相当のプログラミング能力、そしてそのプログラムに耐えられるだけの機械を発明する力

……もし、ワタリが本当は複数の人間で構成されているとしたら能
力はあまり関係ない……けど、しは世界一の探偵。
命を狙われやすい立場にいることから、何人も側に置くわけにはい
かない！だからワタリは単独だと考えた方がいいだろう……
まあ、もつとも、しが複数だつたらその考えはパアだが……それはな
いだろう。複数ならば自分の素性を隠す必要はない。
いくらでも替えがきくのだから……

Sはカタカタとキーボードを打つた。

「ワタリ……」

「ワタリ……？」
プログラミング能力……発明……

……！

Sは何かを思い出したかのようにカタカタとキーボードを打つた。

「……！」

Sの瞳が驚愕に見開かれ、そして確信へ変わった。

「キルシユ・ワイミー……」

Sは不敵に笑つた。

キルシユ・ワイミー……ワタリ。

絶対とは言えないけれど……ワタリは彼ね。
世界一の発明家……にはぴったりだわ。

Sはまたカタカタとキーボードを打つた。

今、Lはおそらく東京にいるわ。

キラが日本について、さらに関東周辺にいると推理したから……
キラを捕まえるなら日本にいなければならない。……さらに、おそらく警視庁の近辺にいるでしょう。

ここ最近キラは警察の情報を使って裁きをしている。……ここからLは警察を疑うでしょう。そして、本当に信頼できる人材を選ぶために……警視庁周辺にLはいる！

Lはカタカタとキーボードを打つと携帯を取りだして、ダイヤルし始めた。

「……」

『はい、じちらーっセイホテルで、』『予約ですか？』

「いえ、そちらに最近外国人の老人が泊まっていますか？老人でなくとも黒ずくめなど、怪しい人物は……」

『いえ、そのような人は……』

「そうですか。』

Lはそういつづつと携帯を切り、またダイヤルし始めた。

警視庁周辺のホテルにLは必ずいる。

とりあえずキルシユ・ワイミーをキーワードに虱潰しに聞くしかない……

『はい、こちら青春ホテルでござります』

』

その頃

警視庁の近くのとあるホテルの一室に、一人の老人が現れた。

「竜崎」

「はい?」

老人 キルシュ・ワイミーことワタリは椅子に体育座りに座つてドーナツを食べている男性に話しかけた。

ワタリの方は柔らかな雰囲気を持つており、おじいちゃんという感じだが、男性はワタリと正反対で、野生児という感じがする。ギヨロリとした目の下に隈があり、黒い髪は伸び放題でボサボサ、服も皺だらけだった。

「これを」

ワタリは男性にノートパソコンを見せた。

男性は親指を噛みながらそれを見た。

私の名前は“S”

そう、それはSが書き込んだものだった。

「Jreは……」

男性は皿を見開いた。

「竜崎……Jreはただの悪戯でしょうか……？」

「……いや、悪戯にしては真に迫りすぎている。キラと私への挑戦
にもとれますが、これだけじゃあ分かりません。
ワタリ、これからそのSという人物に注目しておいてください。」

「はい。」

ワタリは一礼するとそこから去つていった。

男性は“L”は書き込みをじっと見つめた。

「S、ですか……」

『ああ、そのような人ならば我がホテルの隣にあるホテルに出入り
するのを見かけました。

『……やはりホテルを貸しきつにしたよ!』

「……………ですか。実は私の祖父でして。すみません、ありがとうございます。」

Sは携帯を切って不敵に笑った。

見つけた。

貸しきりといふのはちよつと想定してなかつたけど……まあ、結果才

一ライね。

Sは以外と抜けているところがあるのだらうか。世界一の探偵ならば金も相当な額を持つてゐるはずだから貸切くらいたく定するべきだろ? まあ、それはSの性格なのだろう。Sは立ち上がるとベランダに出た。

きれいな夜景が広がつてゐる。

「…………明日、お邪魔するわ。」

「」は警視庁前の通り。

ここにSはいた。

上は長袖のぶかぶかな男物の白いTシャツ、下はジーパンとこうつわ
フな格好をしていた。

……とてもこれからSに会いにいく格好には見えない。

Sは通りのベンチに腰掛けて通りの様子を眺めていた。

「……あなたはおそらく……え、きっとあのホテルにいる。

Sは意を決すると立ち上がり、ホテルの入り口へ向かった。

「のことだから監視カメラは張り巡らしているはずね。
…………こそこそこ入っても、意味はない。それにしがどの部屋にいる
のか分からぬ……
なら、真正面から入るのみ。

Sはそう考えるとホテルの玄関へ堂々と入っていった。

「竜崎」

一方、Lのいる部屋では、Lとワタリが複数あるテレビを見ていた。

「……」

Lはそのテレビの一つを眺めていた。

そのテレビには、ホテルに堂々と入ってきたLが映っていた。

「竜崎……」

ワタリがL 竜崎といつのはLの別名なのだらう に心配そうに呼びかけた。

「……」

Lは人差し指の爪を噛みながら黙つたまま手元にあつたスイッチを入れた。

「誰だ？おまえは」

『誰だ？おまえは』

ホテルのロビーに入った途端、Sの頭上から機械の合成音がした。
Sは上を見上げ、監視カメラを見つけた。

Sは不敵に笑った。

「ほんにちわ、…」。貴方に会いに来たわ。」

Sは監視カメラに向かってそう言った。

『……S、か？』

「あら、書き込みを見ててくれたのね。……その通りよ。私はS。』

Sは思惑通り、といつ風に笑った。

『……今迎えの者がそつちに行く。』

その時、ロビーのエレベーターから黒ずくめの人気が現れた。
黒ずくめはゆっくり歩いてSに近づいた。

「案内します。』

黒ずくめは一瞬こそつひつてエレベーターを指した。

「あつがとく、……ワタリわん？」

「…ワタリです。呼び捨てで構いません。」

「やう」

うはそつとHレベーターに乗り込んだ。

Hレベーターが小さな振動をして上へ動き始めた。
その間、うとワタリはずつと黙つたままだつた。

しばらくするとHレベーターが止まり、ドアが開いた。
ワタリが先を歩き、うはその後をついていった。

するとある一つの部屋の前に着いた。

ワタリは中に、ドアを指示してうを促した。うは微かに頷き、
ドアを開けた。

中は豪華な内装が施されており、うのマンションとたいして変わら
なかつた。

その部屋の奥にこれまた豪華な机と椅子が並んでおり、その椅子の
一つに一人の男性　　しが体育座りで座つていた。

うは初め、このくらしくない容貌に微かに目を見開いたがすぐに不
敵な笑みを浮かべ、に近づいた。

「…初めてして、」。

うがそう言つとずつと紅茶のカップをかき混ぜていたしがそのままのまゝよ
ろじとした顔をうに向かた。

「…初めまして。」

「は紅茶を机に置き、何かを探るような目つきでSを見た。

「…綺麗な人ですね。」

「はニーッと口をつり上げて人差し指の爪を噛んだ。

Sはまさかそう言うことをいわれるとは思つていなかつたらしく、目をパチクリとさせた。

「……ご冗談が上手ですね。」

「いえ、本心です。貴方は綺麗です。」

Sはカツと頬を赤く染めた。「こうこう」とには慣れていないのだろう。しかし、それでも平常心を保とうと口を開いた。

「私はSです。書き込みを見ていただいたようなので分かると思いまが、私は貴方に賛同する人間であり、反対する人間でもあります。」

Sは落ち着きを取り戻したように一息ついた。すると「」が口を開いた。

「……私が「」と信じているんですか？」

Sはふつと笑つた。

「Lじゃなかつたら殺すまでです。

……私はSですが、別にシェリーといつも前もあるんですよ。」

Sは、ぶかぶかのシャツの袖を口に持つていて、噛みながら笑った。
まるで殺したいという衝動を我慢しているかのように。

LはそんなSをじっと見つめた。

「……シェリー

……殺し屋、ですか。ですが……今の貴方は武器を持ってないようです
が。」

「……ふふふつ……」

SはLの言葉にさらに愉快そうに袖を噛みながら笑った。

そして、消えた。

「……？」

Lは驚愕の表情を浮かべた。

先ほどまでLの5メートル先にいたSがいつの間にかLの背後におり、Lの首を絞めるように手をかけていた。

「殺しに道具なんていらないわ。私は“シェリー”……

“人間失格”と言わせているのよ。」

「

「は愉快そうに」の首から手をはずし、そのまま「を背後から抱きしめるようにしてにもたれ掛けた。

「私はいつでも貴方を殺せる。

……もし、貴方がしじゃないと判断したりすぐここに殺すわ。」

「……

「は首をゆっくつ動かし、自分の真横にある「の顔を見つめた。
そして、

チユツ

「はそのまま「の頬に軽いキスをした。

「はしばらくの間、ぱすくりとするとガバッと「から離れた。
そして顔を真っ赤にしてわなわなと震え始めた。

「……貴方本当にショリーですか？隙がありますよ……」

「はさみも愉快そうに人差し指の爪を噛んだ。
Sは」をギリッと睨み付けた。

「わ…悪かったわね！こちらとら4歳の時から殺し屋やつてゐるよー。
貴方のよつこ異性慣れはしてないのよー。」

「はうの言葉に田を大きくして驚いた。

「4歳？それはす」「こですね。」

「な…論点をすりとらないでよー。」

Sは怒鳴った。

「……とつあえず座つて話しませんか？

後、私は異性慣れなんとしてません。貴方が鈍いだけです。」

Sはまだ何か言いたそうな顔をしていたが、諦めて椅子に座つた。

「紅茶をどうぞ。」

Sが紅茶を新たなカップに入れてSに差し出した。

「ありがと…」

Sは紅茶を一口口口に呑んだ。そして、停止した。

「…………」

「どうしました？」

「…………」

Sは紅茶の入ったカップを口から離して机に置いた。

「…………S？」

「は心配そうにSの顔をのぞき込んだ。

その時、Dにからかワタリが現れてSに水を差しだした。

Sは無言で水を受け取ってゴクゴク飲み始めた。

「…………つはあ！」

Sは水を全部飲み干すと苦しそうにギザイゼイ息をしながらDを睨んだ。

「なんなのよー?」の砂糖の塊はー?」

「どうやら」が紅茶に淹れた砂糖の量が多かったらしい。

そう言えばSが飲んだ紅茶は砂糖が余りにも多すぎて砂糖が水を吸

つて紅茶がなくなつて粉になつてた。

それに気づかないSもSだが……

Lは首を傾げてSを見た。

「これくらい普通だと思いますが。」

「…………」

Sは頭を抱えた。

「つてこんな変人だつたわけ！？」

「S？」

「あー……いえ、そろそろ本題に入りましょうか……」

Sはぐつたりと笑つた。

SはLをじつと見つめた。

「……」、書き込みにもあったとおり私は貴方の味方でもあれば敵である。「

「……」

「私はMDSの元で殺し屋稼業をしていた。」

「MDSですか…」

「ええ。4歳の時に…まあ、いいわ。とにかく私はMDSの一員だった。でも、」

「キラに殺された

「ええ。上層部がキラに殺された。そのおかげで私は自由になつたわ。でも、やることがないのよね。ずっと殺し屋だったから…だから、貴方やキラの対決に興味を示したのよね。貴方たちならこの退屈な世界を面白くさせむほど戦いを見せてくれると思ったの。」

Lは訝しげな顔をした。

「キラの殺人が面白いと？」

「ふふつ。私は悪は滅ぶべきだと思つてゐし、命は大切にすべきだとも思つてゐる。…でも、どっちが正しいかなんて分からぬ。…だから」

「は愉快そうに口をつら上げた。

「貴方たちの対決を見せてもらひのよ。しが勝つか…キラが勝つか…面白そうでしょ？」

「面白くありません。それに絶対私が勝ちます。」

「は拗ねたように角砂糖を口の中に放り込んだ。

「……で、君は何故ここに来たんですか？」

「私はこの田で貴方たちの対決を見たいの。……貴方たちを助けてあげたいとも思つてゐるわ。もちろん」とキラ、平等にだけれど。

「助けは要りません。」

「は角砂糖を積み木のように積み上げ始めた。

「私はキラに賛同するような人間の助けは要りません。君は君で」「自由にどうが。」

「そんなこと言つちやつたらキラ側につこちやうナビ?」

「はちぢつと君を見た。

「『』自由に。」

「は」の答えに愉快そうに肩を震わせた。

「そう言つと思つたわ。」、貴方はやはり私が思つたとおりの人間だわ。…気に入つたわ。

……やっぱり貴方の側についてキラとの対決を見たいわ。」

「は眉を潜めてうを見た。

「私は貴方やキラ、それぞれの味方であり、敵でもある。… そう言ったわよね？変更するわ。キラとの決着がつくまで貴方の味方でいてあげる。

……元々私は殺し屋だからキラに命を狙われる立場だしね。」

「はため息をついた。

「ありがとうございます、でも、要りません。」

「私は結構役に立つわよ？殺し屋なだけじゃなくてスパイ活動もしてきたし。

「それに…私を離しておかない方がいいわよ？」

「は角砂糖を一個口に含んだ。

「…私を放つて置いたら…貴方のパートナーが危ないかもよ？」

「……」

「齧すよつで悪いけれど……

私を放つて置いたらキルシゴ・ワイニーさん…ワタリが危ないかもよ?」

「は目を見開いた。

今、この場にはワタリはいなかつたがおそらくビニカで一人を監視しているだらうから驚いているだらう。

「……」

「ああ、『誰です?それ』とか『』自由に、私やワタリは影武者ですか』とかはナシね。

……私をあまり舐めない方がいいわよ?」

Sは酷く歪んだ笑顔を見せた。

「…………何がしたいんですか」

「ん?だつからー、私も貴方の助手?というか部下にして欲しいのよ。そして一緒に捜査したいの!そつすればキラとの対決がこの目で見れるし!」

「はため息をついて足下を見つめた。

Sは楽しそうに「を見つめている。

「……分かりました。貴方には何を言つても無駄なよつですしお」

「ふふつ。…そつと決まつたらよろしくね、」。

「私の」とは」でなく龍崎と呼んでください。用心のためです。」

「分かったわ。私は……Ｓのまままでいいか。」

Ｌは不機嫌そうに積み上げた角砂糖を崩した。
Ｓがどんどん話を進めていったことが気に入らないのだろう。Ｓは
そんなＬを見て苦笑した。

「『めんなさいね。突然押し掛けちゃって。』

……私のいた組織を潰したキラとそれを追う」…それを知った途
端に好奇心が抑えられなくなつてね。」

「いえ、別に構いません……」

「ふふ、構う！…といふ顔をしているわよ？

……龍崎、貴方は本当の名前があるのよね？」

Ｌは首を傾げた。

「確かにありますが、それが何か？」

「そう、……って、気になつたんだけれど…貴方、私がキラだと疑
わないの？」

「はーっ」と子供のよつて口をつり上げた。

「貴方はキラではありません。……アホすぎますから

「…………」

Sは一瞬何を言われたのか分からずぽかんとした。

「ほら、アホ面」

「…………」

Sは顔をひきつらせたぶるぶる体を震わせた。

「まあ、それは冗談だとして……本物のキラは狡猾で、殺人をものともしていません。……S、貴方は少なからず自分が人を殺していると自覚している。

キラならば殺人とは自覚していないはずです。」

Sは真剣な瞳で話すを見つめた。

「貴方はキラではありません。……まあ、キラである確率は0・2%ってところでしょう。

……といふで、何故名前の話を？」

「ああ……私ね、自分の名前を知らないのよ。知らないこと言つよつも……『忘れて』しまったの。

……まあ、ともかく……私の推測なんだけれどね、キラの殺人には顔、そして名前が必要なんぢやないかって思うの。」

「SはSの話に興味を示した風にすいと身を乗り出した。

「Sの名前についても興味はあります……それよりキラの殺人についてです。」

「ん、私はこのとおり殺し屋稼業だから裏社会で殺しについての情報が入ってくるのよ。その中に一つ、興味があるものがあったの。10年前になるんだけど……ある一人の殺し屋がこう言つたらしいのよ。『俺は顔と名前だけで人が殺せる。』と……」

「Sは目を見開いて爪を噛んだ。

「残念ながら、それ以上は知らないわ。その殺し屋、すぐに死んじやつたみたいだから。」

Sは肩をすくめた。

「…………そうですか……でも、いい情報をもらいました。」

「Sは嬉しそうに口をつり上げた。

Sは「Sのその子供みたいな仕草に微笑んだ。

「ではS……部屋は一応こちらで用意します。……が、あまり外には出ていただきたくありません。」

「分かっているわ、竜崎。一度家に戻つてまたここに来るわ。」

「は頷いた。

「……これからよろしくお願ひします。」

「ええ、よろしく。」

「うつむけに、『どうのコンビが現れた。

『キラの決着が付くまで』の味方』になつた。」

果たして、本当に『の味方なのだろうか
そして、自分の名前を『忘れて』しまつたの過去には一体何があ
つたのだろうか

Sは少し用意してもらつた部屋にいた。シャワーを浴びたのかバスローブを着ており、窓から夜景を眺めている。

やつと、殺しの生活から離れられる…

18年…長かった…

Sは嬉しそうに、しかし哀しそうに微笑んだ。

コンコン

その時の部屋のドアからノック音がした。Sはドアを振り返った。

「竜崎です。入ってもよろしいでしょうか。」

「はい。どうぞ。」

Sは少しを中に促して、共にソファに向かい合わせになつて座つた。

「…………」

「がじりとひを見つめている。
Sは誘しげな顔をした。

「竜崎？」

「あ、いえ、…風呂上がりだったんですね。」

Sはそういえばバスローブを着たままだし、髪もつづりと濡れていたな、と自分の髪を触った。

「欲情したの？変態」

Sはクスクス笑いながら口に手をやつた。

「はい。欲情しました。」

「は二ヤツとしてひを見つめる。

「……変態」

Sは嫌な顔をして「」を睨んだ。

「まあ、それはさておき、Sに聞きたい」とがあるんです。」

Sは真剣な表情になつて「を見つめた。

「……と、その前に、Sは4歳の頃からショリーと名乗つて殺し屋をやっていたんですね？」

Sは一瞬、本当に一瞬哀しそうな顔をした。

「……ええ」

Sは無理矢理微笑んだ。

「……これまでに政府の要人などが謎の凶器によつて暗殺されています。……ショリーですか？」

Sは頷いた。

「……私は武器なんて使わなくても素手で一瞬で相手を殺せるから

……」

「……そうですか。……4歳の時にもつすでにそれができたんですか？」

Sは一瞬、昔を思い出した。

どこかの寂れた村

泣き叫ぶ村人

笑い声をあげる男の人たち

私を必死で庇おうとしている男の子

目の前で倒れている女の人と男の人

「…………いいえ。昔のことはほとんど覚えていないんだけど……私は
どこかの村にいたらしくて……MDSがその村を襲つたのよ。
どうしてだつたかは覚えてないけど

まあ、とにかく、村が襲われてみんな次々と死んでいった。そんな
中、私だけは何故かMDSに目を付けられて、連れていかれて……殺
し屋になるための特訓を受けたのよ。

初めは銃やナイフを使ってたけど、そのうち自分で自分の技を編み
出すようになったのよ。

……私は何も覚えてないの。自分の家族も、自分の誕生日も、自分
の名前すらも

「

Sは哀しそうに自嘲した。Lは黙つたままSを見つめている。
Sは上を見上げた。

私は…

私は…誰なんだろう

「S」

Sは「」を見た。」はにこりと笑った。

「大丈夫ですよ。貴方は強くて、頭が良くて、綺麗で、素晴らしい人だけアホで、ドジで、鈍い。
……それが貴方です。名前や誕生日は覚えてなくとも、貴方はそこにいます。」

Sはポカンとした。」はニッと笑った。

私は…ここにいる

Sはしばらくの間」の言葉を頭の中で繰り返した。そして、ゆっくりと微笑んだ。

「……ありがとうございました。ちょっとムカついたけど。」

「どういたしまして。」

Sは「の言葉でずいぶん心が軽くなつたようで、優しい微笑みを浮かべていた。

「……それで、聞きたいことって？」

「ああ、忘れてました。S、貴方はどうやってここのことを見つかったんですか？」

「ああ、それね。

今、キラ事件は警察の情報が漏れているわよね？キラは警察のネットワークを使って様々な実験をしている。

…」このことから、「…」竜崎はまず警察関係者を疑うだらうと思つたの。でも、この事件は竜崎一人じゃあきつい。だから、本当に信頼できる人間を選ぶために警視庁のすぐ近くにいるだらうと思ったの。そして、あとはワタリをキーワードで探つた。
…ほとんど賭に近かつたんだけどね。」

「は嬉しそうに笑つた。

「S、やはり貴方は賢いです。」

「当然でしょ？」

Sは誉められたことが嬉しいのか、にんまりと笑つた。「は真面目な顔をしてSにこう言つた。

「でもアホです。」

「…………」

Sは途端に嫌な顔をする。

「ほら、アホ面」

「…………」

Sはますます嫌な顔をしてLを睨みつけた。
Lはクックッと笑うと立ち上がった。

「それでは。」

嫌な顔をしているSを残してLは去っていった。

「竜崎……」

「が自分の部屋に戻るとワタリが嬉しそうな顔をして話しかけてきた。

「どうした? ワタリ」

「うわんを大層気に入られたようですね。」

ワタリは孫に嫁が出来たと聞いて喜ぶおじいちゃんといつ顔をしていた。「はボリボリと頭を搔いた。

「……何ででしょうね。あのアホと話すのが楽しいんです。」

「はそつ言つて笑つと椅子に座つて紅茶を淹れて飲み始めた。

真つ暗な、何もない闇の中

一人の、少女がそこに立っていた。

年は4歳くらいだろうか、漆黒のショートヘアに泥で汚れて薄茶色になってしまった肌、ボロボロになってしまった着物、血で滲んだ足、そして、全てに絶望した瞳…

その少女はただ立っているだけ、何かをしようとしている。

何をしても無駄だと少女の瞳が語りている。

全てを諦めきってしまったところ。

この子は、誰？

私？

Sは、そこで目が覚めた。

「……変な夢」

「何ですか？」

「うおわああつー？」

Sは突然した声に奇声を上げてベッドから飛び降りた。

「色気のない叫び声ですね。」

「が、Sの部屋のSが寝ついていたベッドに寝つ転がつていた。そもそも自分のベッドです、といつかのように。」
Sは眩眩を覚えた。この男は一体何をやっているのか…

「竜崎…何故？」

「何故って、Sがなかなか起きてこないから迎えに来ただんです。」

Sは頭痛もしてきましたし、頭を押されていました。

「それならもつと普通に起っこしてくださらないかしら？」

Ｌは眉を潜めた。

「それでは王子様のキスとかをすればよかつたなんですか？」

「は…！？ち、違…」

Ｓは慌てて顔をブルンブルンと横に振る。。

「それでは明日からそうします。」

「はあ！？いや、しなくて…」

「ワタリが朝食を用意しましたから私の部屋に来てください。」

「人の話を聞け！」

Ｌはぶらぶら手を振りながらＳの部屋から去つていった。
Ｓはぐつたりと脱力した。

あれが本当に世界一の探偵なの！？

ただの変態じやねえか！

Ｓは諦めたような乾いた笑いを浮かべながら顔を洗いに洗面室に行

つた。

しばらくかした時、SがLの部屋に現れた。

Lはすでに椅子に座つており、机には豪華な洋風の朝食が乗つっていた。

「わーお、豪華。」

Sは驚いた風に机の上の朝食を眺めた。

「ワタリが用意してくれました。」

「へえ。ワタリって、料理も出来るのね。」

Sは感心した風に言いながらの向かいに座つた。

「Sは料理が出来ないんですか?」

「ポイズンクッキングなら得意よ

Sはやうりつとそう言つた。あまりにもやうりつと言つてのけたためにLは変な顔をしてSを見つめた。

「……ジョークよ

「面白くないです」

「は眉を潜めて机の上から菓子パンを取つた。」も苦笑しながらサンドイッチを手に取る。

「んで、竜崎…… これからどうすの? ちやうなの?」

Sはサンディッシュをムシャムシャ頬張りながら」に尋ねた。

「うわー、これで何が見えるの？」

「.....警察の中を探る.....だけど、それはもうひづれでいるん
でしょう？」FBIあたりを使つて。」

「はいの言葉にニツと笑つた。

「鋭いですね。」

「長年殺し屋をやつてきてこられるからね、何となく察しがつくなよな。」

L

「うの言つとおり、FBIを日本に入らせて捜査させています。」

「は菓子パンのチョコレートの部分を舐めながらそう言った。

「……竜崎、『機嫌なところ悪いけれど……』

Sは口をつり上げた。

「そのFBI、死ぬでしょうね」

Sの言葉にLは眉を寄せ、目を見開いた。

Sは冷めた瞳でLを見つめながら微笑んでいた。

「……何故……」

『竜崎！』

LがSに問いただそうとした瞬間、ワタリからの通信が入った。
Lは嫌な予感がしながらも通信のボタンを入れた。

『……日本から捜査官が死亡したとの知らせが入った』

そんな言葉がSの耳に入ってきた。

やはりね。

Sはため息をつきながら紅茶を啜つた。

しばらぐすると」と相手の会話が終わったらしく、LがSの方に向
き直つた。

「何故分かつたんですか」

LはSを睨みつけるよつと見た。

「……FBIが自分を調べていると分かつたら殺すでしょ？」

Sは冷静にそう言った。

「忘れないで。私は元殺し屋のシェリーよ。殺す側の心理くらいす
ぐに掴めるわ。殺す側の人間ってのはね、周りに敏感なのよ。自分

が調べられてることと、すぐさまに分かつたでしょ。」

ましてやキラは世界一の探偵と名高いと渡り合ひはじの頭脳を持つ。

……たかがFBI、すぐには始末できただよ。みう。

「は嘲るよ。」

「……」

「ほんまにうせす、だいを睨むだけだった。

「今回キャラの勝ちね。」

「せいやこと口上づけた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9406c/>

DEATH NOTE ~parallel world~

2010年10月10日18時04分発行